

NSRI 都市・環境フォーラム

古橋広之進氏講演
「フジヤマの飛び魚が見た昭和とこれから」

2007年7月19日

経団連ホール

古橋先生 このたびはこうした立派な講演会にお招きいただきまして、たいへん光栄に存じております。

先刻来、是非、お話をとということでご依頼を受けました。私、最近はほとんど勉強もしませんし、経験話のようなことでいいんですかと言ったら、それで結構です、むしろその方がいいと言われ、自分の経験したことをしゃべればいいのなら引き受けましょうということで、今日こちらに参上いたしました。皆さんにお目にかかってお話しする機会を得ましたことをたいへん光栄に存じます。

私もだいぶ年寄りになりまして、今年9月に誕生日が来ますと79歳。よくここまで生き延びたなと自分自身で感心いたしております。というのは、戦後、ほとんど飲まず食わずの生活をしておりました。泳いでいた時も、お米のようなものは食わず、我々はほとんどサツマイモです。これに、岩塩というものをかみながら食べました。サツマイモだけだと、胸が焼けて、とてもではないけれども、途中で泳げなくなってしまいます。胸が引き裂かれるような、焼けるような感じになります。だから、岩塩をしょっちゅうかみながら練習したことを覚えています。

私は、小学校時代に父親から「お前、大きくなったら奉公に行くか、相撲取りになるか、どっちがいいか」と言われ、奉公に行くぐらいなら相撲取りになった方がいい、と考えました。田舎ですから、小学校を卒業するとみんなどこか丁稚奉公に出かけるわけですが、そういうものに出かけた方がいいのか、それとも相撲取りになる方がいいのかと言うから、それは相撲取りになった方がいい、と答えたわけです。そうしたら、「それなら今日から自分でそのつもりで生活しろ」と言われ、子供ながらに、わかった、それじゃあ、ものをたくさん食べる、なるべく体が大きくなるようにいろんな運動をする、というようなことを心がけておりました。

そのチェックは、三尺と称して胴回りに帯を締めて、手ばかりです。当時は今みたいに電気で計量するような道具はありませんから、手でグーッと締める。力があつたんです、ぼくの親父というのは、5尺8寸5分というんですから、だいたい1メートル80に欠けるか欠けないぐらい、体重は23貫500か24貫ぐらい、結構大きな体格をしておりました。父親は「若力」という四股名を自分で持っておりまして、田舎相撲がありますと必ず「出てくれ」と呼びに来ていました。すると喜んで、「若力」の名前を前に付けて相撲大会に出るのですが、ほとんど負けたことがなかったそうです。体も大きかったし、力が物凄くありましたので、どこでも優勝するというような父親でした。

その父親が、大きくなって相撲取りになるのなら、体重は8歳の時は8貫なければだめだと言って、手ばかりで量るわけです。もっと食べなければだめだ、こんなものでは食いが足りない、と。それから身長は柱に傷をつけ、もっと大きくなければだめだ、もっと高くならなければ強くない、ちょっとその木にぶら下がってこいとか、鉄棒にぶら下がってもうちょっと身長を伸ばすようにやれ、とか言われ、ぼくも親父の言うことをそのまま聞いてやっておりました。

ぼくは9人兄弟の上から3番目でした。上から2番目の姉さんが、昔流でいうと疫痢で、ピワを食べて5歳の時に死んでしまったので1人だけ欠けていますが、今も8人はみんな元気で生活しています。男はぼくと、昭和16年に生まれた弟がおりまして2人だけ、あとは全部女性です。そんなことで、相撲取りになるつもりで一生懸命にやっておりました。

ところが小学校4年生の時、昭和12年、13年頃に、ぼくらの村にプールができました。プールといっても今のようにコンクリートのプールではなくて、浜名湖に杭を打って沿岸のところを囲った自家製のプールです。我々の田舎に江馬九右衛門という豪農がいて、その人が青少年育成のために何か役に立ちたい、この辺は水泳が盛んだからプールがいいのではないかということで、ぼくが4年生の時にそのプールを造ってくれたのです。観覧席は7~8段、コンクリートで固めて、あとは杭棒を海の中に打って周りを囲い、日が直接当たりますと暑いですから、上によしずをかけて、そこで練習をやっていました。コースロープはみんな手でなった縄です。

ぼくは、浜名湖沿岸の、今は浜松市になった雄踏町山崎というところで生まれ、3年生までは分校だったのですが、4年生で本校に通えるようになりました。4年生以上でないと、水泳部には入れませんでした。もう一つ、勉強がある程度できないと、水泳部に入れてくれないのです。ぼくはあんまり勉強しなかったけれども、そのわりには成績がいいほうでした。「お前は入る資格はある。しかし、泳げるのか」「いや、泳げないんです」「じゃあ、練習しろ」と。

当時は縦のつながりで、一番上が高等2年。田舎の、子供の親分みたいなのがいまして、それがいろんなことを命令するんです。グミが成っているから取って来いとか、椎の木を揺すって椎を落とせとか、何々がどここの家にあるからそれと取ってこいとか、いろんな指令を出し、ぼくらは下働きでそれを取りにいて献上するわけです。そんなことをすると同時に、その高等2年の上級生にいろいろなことを教えてもらいました。こういうことはだめだよと。ただ、人のものを取って来たりするのはそれほど厳しくないませんでしたし

たが。(笑)他のことは、結構いろいろなことを指導してくれました。いちばん怖いのは父親ですが、実際にはそういったグループの幹部の連中が非常に怖かった。だから、言うことを聞いてやっていました。

それで、4年生になってプールができ、そこでみんな練習するようになりました。水泳部に入れてもらうには、ある程度泳げなければだめだから、みんなが練習を始めると、ぼくはプールの外側で、中でやっている連中と同じように泳いで、なるべく先生の目につくようにやっていました。そのデモンストレーションみたいなものが功を奏し、「あれを連れて来い。あれは毎日来て一生懸命にやっているようだ」ということになりました。それで連れて行かれて、「どうだ、プールは」「ともかく水泳部に入って一生懸命にやりたいんです」。父親にも「もう相撲取りはやめて、ぼくは水泳の選手になるよ」「おう、それも結構じゃないか。やるのなら一生懸命にやれよ」と言われ、その時から水泳の選手を目指すようになりました。

浜名湖沿岸は水泳が非常に盛んです。雄踏町、舞阪町、新居、鷺津、新所、知波田、いろいろな村があるのですが、みんな木で囲ったプールを持っていてそこで訓練し、試合になると、ダンベイ船と称する土だとかいろいろなものを運ぶ船があるのですが、それに乗って村中総出で行くのです。中は着替え室でもあるし、食堂でもあるし、休憩室でもあるし、その中で何でもやります。村の役員みたいな人も一緒になって、浜名湖を渡って対岸まで出かけるわけです。今度はどこそこの村、次はどこそこの村といって順繰りでやるわけです。

それがお互いに競ってやるような大きな水泳大会でした。ぼくも4年生から出るということから出たのですが、塩水ですから耳を痛め、外耳炎になりました。あまり練習ができまないので、試合にはほとんど出ませんでした。出た大会では、やっと決勝に残るか残らないかという、そんなレベルでした。

5年生になったら耳も治り、練習も一生懸命にやりました。すると、ぐんぐん強くなってきました。1番にはなれませんでした。3番か4番ぐらいのところまで行き、一生懸命にやっていると、なお行くのではないかと思いました。それからどんどん練習していたら日に日に強くなり、これはもっと強くなるぞと自分で思いましたね。

6年生になって初めて、県の大会というのがあってそれに出ると言われました。先生に連れられて、舞阪という駅から静岡まで初めて汽車に乗りました。父親も、「ともかくしっかり頑張ってやってこいよ」と言って駅まで送りに来ました。ぼくらは5~6人で、先生

に連れられて大会のある大浜プールに行きました。これは県下の大会で、小学生の部、中学生の部、あるいは実業団の部、いろいろに分かれ、さらに男女に分かれていて、ぼくらは小学生の男子の部に出たのですが、そうしたらぼくは100メートルと200メートルで優勝したのです。その記録が、当時、学童では一番いい記録でした。学童日本記録です。

当時は戦争中のことで全国大会はありませんから、いろいろな地方でやった記録が全部水泳連盟に集結され、そこで順番や成績がトータルにチェックされました。そうしたら、ぼくの記録が全国一番。雄踏小学校が全国の小学校の部で優勝し、それで有名になって、静岡新聞が「豆魚雷現る」というタイトルでぼくの記事を書きました。今の子供に豆魚雷と言っても誰も知りませんが、戦争中のことですから、豆魚雷というと、そんな凄いのが出てきたのかとみんなびっくりしたんですね。新聞に出て「あその息子は結構水泳が速いらしいよ」と噂になりました。

今度はいよいよ中学に行くわけですが、小学校が終わって冬休み、中学に行くまでの間に多くの学校の校長先生が来ました。ぼくは浜松に近いところの中学校に行きたかったのですが、沼津からも来る、静岡からも来る、清水からも来る、それから袋井や掛川、地元の浜松、愛知の中京や、東邦、岐阜商業などからも、校長先生が菓子折りを持って家を訪ねてくるのです。なんとかうちの学校に来て勉強しながら泳いでもらえないかというのです。

父親は、「お前がやるのだから俺は干渉しない。お前が好きなところを選んで行ったらどうだ。中学に行くことには賛成である」と言っていました。当時、田舎で中学に行くなどというのは大変なことです。ぼくらの村でも2人か3人ぐらいしか行かない。しかし、中学に行くことには賛成だから、お前の権利で選べと言われて、結果的には浜松二中（現在浜松西高j）に進むことにしました。

受け持ちの先生は、校長先生も含めて浜松一中に行けというのです。何故だと言ったら、「浜松一中のほうに伝統もあるし、プールも50メートルプールだし、環境もいい。今の君の成績なら十分入れるから行け」。あんまり浜松一中を褒めちぎるものだから、なんとなく嫌になって「じゃあ、俺は浜松二中に行く」と言いました。浜松二中は、ぼくが第18回の卒業生ですからそんなに伝統があるわけではない。それから、25メートルのプールしかない。地元では、一中に比べると2番目というような感じの学校だ。ぼくは、そういうところに行って頑張るのだ、環境の整ったところに行くのでは面白くないと子供ながらに思いまして、結局、浜松二中に進学しました。

受け持ちの先生や校長先生は気に入らなくて、学校に行くと、「立ってろ」と言うので教室の前に立たされたり、教員室の前に立たされたり、校長室の横っちょに一日中立っていたり、ずいぶん体罰を食らいました。それでも、「お前、まだ変わらないのか」「変わりません。二中に行くんです」「なんで一中に行かないのだ」「ぼくは二中に行くんです」と、とうとう二中に行きました。

当時、戦争がだんだん激しくなり、中学に入っても満足に勉強することはなくて勤労奉仕です。暗渠排水といって、田んぼを掘りあげて中に竹の筒みたいなものを埋め、水はけをよくしてたくさんの食糧を作ろうではないか、お米を作ろうではないかという作業がありました。1時間か2時間授業をやりますと、スコップだの鍬だのを担いで農家に出かけます。それが終わると、また隊列を作って学校まで戻るので、戻ってから授業は全くやりません。ぼくは、夏場は水泳です。プールに行ったらすぐに裸になって水泳をやる。だいたい暗くなるまで、夏は日が長いですから8時、9時まで、一生懸命練習する。それで、家には歩いて帰るわけですから、夜中に近いぐらいの時間に家にたどり着く、というような生活をずっとやっておりました。

1年生の時、浜名湾の近所の中学校を集めた大会がありまして、5番目でした。だいたい中学校5年生が一番速かったのですが、ぼくは中学校1年生でそれに混じって出て5番目か6番目ぐらいで入賞し、みんなびっくりしました。1年生でこんなに速いやつが出てきたぞというようなことで、えらい有名になりました。

2年生になって県下大会があり、また静岡の大浜プールに出かけました。1番になったのは沼津中学の川口選手で、4年生か5年生でした。ぼくは2年生と一緒に泳いだのですが、川口選手がタッチの差で1番、ぼくが2番。川口選手は県下の中学校大会の記録を塗り替え、ぼくの方も今までの中学校の記録を破りました。静岡県は非常にレベルが高く、静岡の記録を破れば全国大会で1番か2番でしたから、みんなびっくりし、「おい、静岡に強いやつがおるぞ」というようなことなのですが、すでに全国大会はありませんでした。

2年生の後半からは勤労働員です。ぼくらは今のスズキの前身の鈴木織機に動員になりました。このごろは、軽自動車で景気がよくて、鈴木修という会長がえらい勢いがいいのですが、そこに勤労働員で行きました。授業は全くなしです。家には全然帰らず、二交代か時には三交代でぶっ通しで仕事をし、鈴木織機の寮に帰って寮で寝ていました。それで、確か3年生の時にぼくは旋盤に挟まれてしまったのです。

そこでは12~13インチの高射砲弾を作っており、ぼくも旋盤を回して高射砲弾のネジ

作りに毎日頑張っていました。ところが、隣の第三工場に友達がいたので行って話をしている時、ちょっとベルトに触っただけで歯車にかまれてしまい、ワッと持っていかれてしまいました。それで中指の指先を切断することになりました。これでは、仮に戦争が終わっても水泳はできないな、それから、両親に対して悪いことをしてしまったな、もう一つ、兵隊にはとても行けないな、と感じました。

浜松の遠州病院に連れて行かれたのですが、当時は麻酔もないんです。指先がばらばらになってまだついていたのですが、それを切り落とすのに麻酔をかけない。それから、油がべとべとついたままでしたから、それを取るのに痛くてどうしようもなかったのですが、とにかくふき取るようにしてきれいにしてもらいました。「これ、伸びますか」と聞いたら、「伸びることはないだろうけれども、今よりは楽になるだろう」というぐらいのことで、これはもうだめだなと思いました。それからしばらく工場の作業は休んで病院通いをしていましたが、ある程度仕事ができるようになると、また現場に戻りました。もちろん、水泳の練習をやるような環境ではありません。ずっと工場で働いていました。

それで4年生になるのですが、当時、戦時特別措置みたいなことで、4年生と5年生は同じに卒業したのです。ですからぼくは4年生で、1年上の5年生と一緒に卒業しました。卒業後は、できれば地元の浜松高等工業に行きたいと思っていましたが、勉強は全然してないので通るか通らないかわからない。そうこうしているうちに、日大の予科（理科）を受けることにしました。当時、理科は兵役延長になりましたので2600人ぐらい受けて200人が合格したのですが、ぼくはたまたまうまく合格し、日大に入ることになりました。

当時は試験といっても学科試験などは全然ありません。あったら、勉強していませんから、おそらくみんな落っこちたのではないかと思います。筆記試験は、軍人勅諭をわかるだけ書けと言って、わら半紙みたいなものが配られました。知っているだけ書いて提出する。次は上半身裸になり、銃剣術。試験が1月頃でしたから寒いのですが、木製の銃の先に短い刀剣を付けたもので人形をヤーッと突くわけです。気合が入っているかどうか見たのでしょう、でかい声でヤーッとやったら、「なかなか元気がいいな」と言うから「いや、元気がいいんです」ととぼけていました。

それが終わったら面接がありました。皆さまご存じだと思いますが、旧制大学は予科と本科があり、予科を3年やり、あと3年、本科に行くわけです。その予科の理科に入ったのですが、予科長が試験官でした。それと、ナカジマという陸軍大佐が配属将校でいまして、それが立ち会い、2人で面接が行われました。1人ずつ部屋に呼んでいろいろな質問

をしたのですが、「君は内申書に得意は水泳と書いているが、どのくらい泳げるのか」と聞かれ、「いくらでも泳げます」と答えると、「いくらでもではわからない。500メートル泳げるか」「泳げます」「1000メートルは?」「泳げます」「アメリカまで泳げるか」「泳げます」「なかなか元気のある青年だな。大したものだ。泳げるのか。本当に大丈夫か」「絶対泳げます」。どうもそれが効果があったらしく、発表を見に行ったらちゃんと合格者の中に入っていました。

しかし、入学が決まって、また勤労働員です。今度は神奈川県の高座海軍工廠のすぐ隣、高座海軍工廠に配属されました。そこでは雷電や紫電などを造っていました。ぼくらは機械いじりはできませんし、飛行機など造れませんから、そういうものはみんな専門家が造ります。「君たちは働いている連中の食糧づくりをやれ」と言うのです。日大と東大がそこに派遣され、南林間とか中央林間とか新長後とか、あの辺の雑木を全部切って開墾し、サツマイモを植えて、できたサツマイモを工場で働いている人たちの食糧にするということでした。

ところが、空襲はどんどん激しくなる。宿舎を出るのも、暗いうちでないとグラマンが飛んでくる。艦載機で厚木航空隊を爆撃に来るわけです。ぼくらはそれでひどい目に遭いましたから、暗いうちに出るんです。すると、隊列を組んでいても大丈夫ですから、4時半ごろ宿舎を出て、鋤を担いで現地まで行って作業を始める。作業をしている間にまたグラマンが来る。そこで、防空壕も何もないので草陰に隠れて、グラマンが機銃掃射をして帰るまで待っている。行ってしまったというのが確認できると、また作業を始めるわけです。

帰りは、暗くならないとまた狙われてしまいます。だから、暗くなってから鋤を担いで宿舎に帰ってくるのですが、宿舎には風呂も何もない。しょうがないから、井戸水をくんでワットと体を洗って寝るわけです。しかし、宿舎に蚊帳も何もありません。筒抜けの部屋に寝るのですが、やぶ蚊がいっぱいいまして寝られたものではない。そんなところで寝て、また朝4時半頃出かけるのです。

食べ物は、お米はあんまりありません。豆かすとか、大豆、スイトン、そんなものが出てきて、それをちょっと食べて出かける。昼飯は、食管当番というものがあり、それが運ぶわけですが、大豆一握りと握り飯1個です。それを食べて、近所の井戸水をもらって水を飲んで一休みし、また作業をやる。そんなことを毎日続けてやっていました。

8月15日になりましたら、高座海軍工廠の食堂に集められました。配属将校みたいな人

と実際の青年将校が監督として工場に来ていたのですが、全部食堂に集まって玉音放送を聞くことになりました。それが、鉱石ラジオか何か知りませんが、声がよくわからない。勝ったのだから負けたのだから、全然わかりません。そのうちにピストルで自殺するやつがいる。短刀を腹に突きつけてその場で死ぬのがある。いったいどうなったのか、わけがわからない。「我が皇軍に降伏なし」と言って張り切っていた青年将校がたくさんいたのです。そして「お前たちはこれから戦争に行きやるんだ。厚木航空隊、集まれ」と言うから、我々もどっちにしているのか、わけがわからない。みんなぞろぞろ行くから後をついて行ったのですが、どうもおかしいので途中で帰ってきました。

その日から仕事がなくなりました。宿舎でぶらぶらしていたら、ここだけの話、台湾から徴用で来ていた少年が暴動を起こして略奪だ、何だ大変でした。だから、ぼくらは取られないように、事故のないように、不寝番というのをやって、8月23日にやっと解放されました。

解放されてすぐに帰ろうと思ったのですが、切符が全然買えません。しょうがないから、いとこが嫁に行っていた鶴見区豊岡まで出かけました。帰りたいのだが、帰れない、歩いて帰るわけにもいかないから、ちょっと置いてくれとあって、そこに泊めてもらいました。「何か、仕事はないですかね、アルバイトみたいなものは」と言ったら、あると言うのです。何かと聞いたら、生麦からコールトールの入ったドラム缶を積んで川崎まで運ぶ仕事です。「やるか」と言うから、荷車にドラム缶を2本ずつ積んで第二京浜を運びました。

当時は、車も何も通らないし、焼け野原です。川崎の明治製菓の横のところで、あんまり暑いから真っ裸になって泳ぎました。ふんどしを持っているわけではないし、人が見ているわけでもないのだから、荷物は車に積んだまま、全部脱いで飛び込みました。多摩川なのか鶴見川なのか、よくわかりませんが、そこで泳いだのです。そうしたら、結構うまく泳げるんです。水泳は一度覚えたら忘れないのだなと思いました。泳いで上がったから、タオルも何も持っていませんから土手っ原に横になって乾かし、また洋服を着て荷車を引き、荷物を納めて生麦まで帰る。そういう作業をしていました。

当時、鶴見の駅にはまだ捕虜がいました。鶴見に抑留所というのがありましたから、豪州軍と英国関係、カナダの連中がいて、それが言うことを聞かなくなって駅などは騒然としていました。威張ったり、中には、今まで苦しめられたから敵討ちだと言って暴れるやつがいたり、ぼくも怖いから表に出られない。物資をアメリカ軍などがしょっちゅう落とすに來るのですが、それを拾ったりしたらすぐにMPに連れて行かれてどうにもならな

いから、飛行機の爆音がするとみんな家の中に入って雨戸を閉めてじっとしている。爆音が消えた頃に、ぼくらはまた表に出るということをやっていました。あとはそのアルバイトです。いくらもらったのか、ともかく切符代になるぐらいは稼ぎました。

お腹がすいてどうしようもなく、食べたくてしょうがない。横浜の南京町まで行くと、白米丼1杯が10円だったか100円だったか、単位がはっきりしませんが、結構高かったですね。それを食べると、やっと生きているという感覚がわきました。

どうしても田舎に帰るということで切符を頼んでいました。ぼくらが泊まった家の人が清水運送といって駅の運送の仕事をやっていたんですね。だから駅の事情をよく知っていたので頼んでおいたら切符が手に入り、いよいよ浜松に帰りました。浜松は中島飛行機だのいろんなものがありまして艦砲射撃にやられましたから、ぼくらの町は全滅でした。うちにも焼夷弾が落ちましたし、しかも、友達はみんなどこかへ行ってしまってわけがわかりません。どうしたらいいかと思っっているいろいろ探していくのですが、なかなか友達が見当たらない。そのうちに一人を見つけました。それがたまたま船を持っていた。だから船をなんとか出してもらうことにし、缶詰などの食料、その他のものを全部積んで出かけました。

これから実際にどうなるのか、我々は何をしたらいいのかということで、浜名湖を遊覧していました。そうしたらだんだん食料がなくなってしまい、どこかでかっぱらう以外に方法がないというわけです。夜、上陸して、夏場ですからナスやキュウリを取りに行くのですが、ある日、ぼくはマムシを踏んで足の人指し指に食いつかれてしまいました。子供の時からマムシは畑にいましたからマムシに間違いはない。これは大変なことになったと思ってすぐに船に戻り、友達に日本タオルを裂いてもらって、血液が移動しないようにそれで関節のところを縛ったのですが、医者に診せると、泥棒していたのがわかってしまうから、医者には行けない。友達に空き缶に小便をしてもらい、アンモニアで消毒になるだろうという愚かな考えで、その中に足を突っ込んだのですが、縛っているから痛いんです。一晩中、うなって、明るくなればやれやれです。そんなことをしていたら足の皮が全部むけてしまいました。毒は足の指に口をつけて吸い出してもらいましたから、結局、毒は回りませんでした。ただ痛いだけで、ヒーヒー言いましたが、これ以上、こんなことをしていたらとんでもないことになってしまうから帰ろうということで帰り、家にしばらくいました。

そうしたら、大学から手紙が来ていました。大学は閉鎖していて、連合軍から再開してよいというお達しは来ていないが、それが来たら連絡するから待っているというので、家

で待っていました。すると大学から連絡があって、マッカーサーが厚木に来て大学を再開してよしいという許可が出たから、昭和 21 年 1 月から再開する、登校するか、やめるか、はっきり返事をしろということで、父親に話をしたら「せっかく行ったのだから、続くところまで行けよ」と言われ、行くという返事を出しました。

21 年 1 月、また鶴見の清水さんを頼って横浜に出てきて、そこから学校に通いました。小田急沿線の六会というところに学校がありましたが、当時は湘南電車がありませんから、たったのひと駅なのですが、大船で汽車に乗り換えないと藤沢まで行けないのです。横浜から汽車に乗り換えていく方法もありますが、大船からは横須賀の方へ行ってしまうから下りて、汽車を待って飛び乗り、藤沢に行って藤沢本町、六会。六会で下りて授業を受けていましたが、戦争中、やっていないから全然わからない。ぼくは理系ですから、数学はピタゴラスの定理だ、やれ何だというけれども、よくわからない。動物学はある、化学はある、物理はある。理系の科目を全部やるわけです。友達に「お前、わかるか」と聞くと、「いや、わからない」。わからないはずです。授業など全然受けていないのですから。別の友達に聞いても、「いや、俺も全然わからない」。じゃあ、みんな同じだと思って、知らん顔をして教室で先生の講義を聞いていました。

試験に通ったのか通らないのかよくわからないうちに、4 月になったら予科の 2 年生に進学し、5 月頃になったら、河合という友達がぼくのところに来て、「古橋、君は昔、水泳をやっていた古橋ではないか」と聞きます。「昔、やっていた」「覚えている。水泳部員募集というのが出ているから応募しろ」と言うのです。ところが、こっちは勤労働員で指を怪我している、練習は全くしていない、食べ物は全然ない。とても行けないという話をしました。

そうしたら、河合というのは三島から通っていて、サツマイモでよかったら持ってきてやるからそれを食ってやれと言うのです。「食ってやれと言っても、日曜日はどうするのだ」と言ったら、「日曜日も持って行ってやる」。そこまで熱心に言うのならと、入部テストを受けに行きました。昔の帝都線、今の井の頭線東松原に日本学園というのが、そこに集まれというのですが、行くのが大変でした。

六会から小田急線に乗って下北沢まで行くのですが、これが 1 時間に 1 本あるかないか。しかも、超満員でなかなか乗れない。下北沢まで行ったらまた乗り換えて東松原まで行きます。その時は日大水泳部ではなく、学部ごとの水泳部です。経済学部水泳部とか、法文学部水泳部とか、理工学部水泳部とか、歯学部の水泳部とか、そういうものが寄り集まっ

でそこで練習していました。そのプールが防火用水に使われていて、水を全然替えていない。当時は今のように保健所というのはありませんから、ドロドロですごい水なのです。泳いで上がると、眉毛などにアオサがくっついている。大変な水です。

行ったら「ふんどしを貸してやるから、泳いでみる。昔、やっていたのか」「やったことがあるんです」。泳いだら、「お前、おかしな泳ぎ方をしているな」「ええ、おかしな泳ぎ方をしているんです」「やる気はあるのか」「やる気は十分あります」「じゃあ、明日から出てこられるか」「出てきます」。あくる日から授業が終わると、ずっと同じパターンで、六会から下北沢、下北沢から東松原、終わると渋谷に出て、渋谷から品川、品川から鶴見まで行って下宿に戻るということをやっていました。

その下宿も、4畳半に4人下宿していました。3人までは横になって寝られるのですが、1人はどうしても寝られない。しょうがない、ぼくが一番若手だから壁に寄りかかり、誰かが少し遅くなったりすると、その時間をうまく利用して横になって寝させてもらうというような生活をしていました。

授業にも行って、終わると水泳の練習をするという生活をしていたのですが、6月に入ったら家から電報が来ました。「八八キトク スグカエレ」という電報で、困ったことになったと思いました。キャプテンは牧野信太郎という人です。横浜の、あんまり泳げないキャプテンでしたが、まとめの幹事だったんですね。それから、佐和橋というのが同じ学部出身で、これがマネージャー。「こういう電報が来たんだけど、帰っていいか」と言ったら、「帰ってこい。これは大変じゃないか」。許可が出たので、ぼくは練習を休んで帰りました。

おふくろは風邪を引いて肺炎を起こしたのです。当時、抗生物質はありません。鯉の生血がいいと言うので、ぼくはすぐに養魚場に行って血を絞ってもらい、飲ませていたのですが、なかなかよくなりません。3日ばかりたったら死んでしまいました。これはもうだめだと思い、東京にも帰らないで家にじっとしていました。初七日が済んだら父親に呼び出され、「お前、もう一度戻れ」と言うのです。そうは言ってもこんな状況では戻れない。下の子はまだ2歳で、8人兄弟のうちぼく1人だけが外に出ているから、親は7人の面倒を見なければいけない。だから「だめだ」という話をしていました。ところが、「お前、行け」と言って、少しの米と切符を買ってくれたのです。ぼくはそれをもってまた出てきて、プールへ戻りました。

そうしたら、試合をやることになったと言うんです。「どこでやるんですか」と言ったら、日大のプールが目黒の碑文谷にあって、戦争中に傷んで水がみんな抜けてしまい、使えな

かったのですが、どこからコンクリートを持ってきたのかよくわかりませんが、セメントを持ってきてみんなで直した。井戸水と水道水、両方で水を入れている。水道水は昼間使うと水圧がなくて近所がみんな断水してしまうので、昼間は使えない。昼間は井戸水でやり、夜、寝静まったところを見計らって水道水に切り替えると、すぐに満杯になる。それで、7月16日に試合をやることになった、ということでした。

試合の相手方は、3大学対抗と称して日大、立教、明治。日大プールの修理がなって水も満杯になるから、そこを使ってやる。「お前はおふくろの病気でしばらく練習していないから、人の何倍もやれ」と、えらくしごかれました。

いよいよ試合の当日です。ピストルを撃ったらMPに連れて行かれるからピストルは撃たない。許可が出ない。しょうがない、手で合図する。時計は、ストップウォッチがありませんから腕時計です。当時の腕時計は秒針がものすごく小さいのですが、「ヨーイドン」で何時何分何秒みたいなことをメモする。到着すると、横っちょに学生が待っていて、「5コース」「4コース」という具合に合図し、こちらで引き算で記録する。ところが、1分ぐらい余分に引いたりすると、当時なら世界記録だったりする。検算してみると、1分余分に引いてしまったとか、大変なことでした。コースロープは縄で、観客はゼロ。土手っ原に近所の子供が2~3人、ふざけて遊んでいる程度です。

そういうプールでやったのですが、400メートルと800メートルでぼくは優勝してしまったのです。「お前、速いな」というわけで、みんなびっくりしていました。確かに、いい記録でした。大学生の大会で、まさかぼくが1等になるとは知らなかったから、言われるとおり速いな、もっと頑張ったらいいところに行くのではないかと思います。

ところで、その泳ぎですが、今までは右で呼吸していました。呼吸する時、反対側の手が非常に大事です。ストロークを長くしてグーッとかくわけですから。ところが左手はツルンと水がぬけてしまうのです。これはだめだ、呼吸を左できるように替えないといけない。左で呼吸をするようにして、右手が使えるようにし、ストロークを長くして水をグッとつかみ、最後までかくわけです。足も六つ打っていたものを四つにする。実際には小さいのが入って五つなのですが、腕に合わせて、腕を支援するように打つことを考え、そういう練習をやっていました。そうしたら、記録がどんどん縮まってくる。ひょっとしたらいいところに行くのではないかと思います。

その年が戦後初めての国民体育大会の年です。第1回国民体育大会夏の大会は8月に兵庫県宝塚で行われました。それに出ると言われたのですが、どこに申し込んでいいのかも

わからない。水泳連盟がいったいどこにあるのかわからない。宿舎もどこに申し込んでいいのかわからない。第一、金がない。金がないから行かないと言ってプールで練習していたら、仙台出身の鷺谷光明という先輩が来て、「金を持っているか」とぼくに聞くのです。「いや、持っていません」「じゃあ、米を持っているか」「持っていません」。なんで聞くのかと思ったら、「これから国体に行くのだ。お前も一緒に行けよ。俺が連れて行ってやるから」。連れて行ってやるというから、切符でも買ってきて乗せてくれるのかと思ったらそうではなくて、東京駅の横っちょのほうから、「オーイ、走れ、走れ。もう出てしまうぞ」と言われ、ワッと走って行って飛び乗った。無賃乗車です。捕まったら大変だから、死に物狂いです。(笑)

「乗ったら、お前、絶対に後ろを向いたらだめだ。進行方向を向いている」と言うのです。電信柱に引っかかって振り落とされてしまいますから、じっと前を見つめていく。「鉄橋では足が引っかかるから気をつけろ」。前を向いて、鉄橋に来たなと思ったら足のほうも気をつける。大きな駅に近づくと、まだ汽車が走っているうちに飛び下り、しばらく汽車と競走するみたいにして反対側から抜けて逃げてしまう。駅前に出て雑貨店や酒屋などに「この辺に商業学校か農学校か何かありませんか」と聞くと、「あるよ」「そこにはプールがありますか」。プールといっても当時はよくわからない。「じゃあ、ここをまっすぐ行くと左側になんとかという学校があるから、そこに行ってみろ」。行くと、プールはあるけれども、防火用水なのです。

ドロドロでゲンゴロウは泳いでいる、変な木材は入っている。それでも小使いさんをお願いすると、「あんた方は何ですか」「国体というものがあるから、それに出るんだ」「国体って何ですか」「こういうスポーツの大会だ」「そんなものに出るんですか。大変じゃないですか。うちのプールは水が入っていることは入っているけれども、戦争中から替えていない」。ドロドロなのです。鷺谷先輩というのが「水があるからいいじゃないか。一緒にやろうよ」と言うので、材木を全部上にほうり投げ、ゲンゴロウは出せませんからそのまま、お互いに記録を取り合いながら練習しました。すると、小使いさんが見に来るんです。「あなた方、大変ですね。腹が減るでしょう」「腹が減ってしょうがないんだ」「じゃあ、今サツマイモをふかしているから食っていけ」。お金がないから、ただで食べさせてもらうわけです。食べたなら、「せっかくごちそうになったのだからもうひと練習しよう」と、また練習する。夜になると「小使い室に泊まって行ったらどうですか」「それは是非お願いします」。朝 4 時半だか 5 時頃の汽車があり、それはすいているからというのでそれまで泊め

てもらい、朝はまた小使いさんがサツマイモをふかしてぼくらに持たせてくれる。同じパターンで、汽車が出そうになるとダーッと走って飛び乗り、前を向いて、足のほうを注意しながら行くわけです。

小さい駅では検札になど来ませんから、下りて体操か何かやるとぼけているだけで、動き出すとまた乗る。大きな駅になると、止まってから下りたのでは駅員に捕まってしまうから走っている間に飛び下り、端のほうから外へ出る。大きな駅でないと、中学校などないわけです。そこで下りて、また尋ねる。同じパターンで、1週間かけて宝塚まで行きました。

無愛想で、飯も食わせてくれなければ、練習をしていいのか悪いのかわけのわからないような小使いさんもいました。「泊まれ」と言わないから、そういう時はやむを得ず野宿です。泊めてくれとも言えないから、「今日は野宿しようよ」と言って、川原に行って寝るんです。朝早く、汽車が来たら飛び乗り、次へ行く。1週間かかりました。

宝塚では旅館など申し込んでいませんから、ぼくらは野宿するよりしょうがありません。なるべく暗くなるまで練習し、暗くなると川べりを探します。やぶ蚊がいて大変なのですが、鷺谷先輩が「ここで寝ろ。ふんどしをたくさん持っているだろう」「2、3本持っている」「それで出ているところを巻け。そうすると、蚊に刺されないから」。それで水の中に入ったり出たりしながら寝るんです。明るくなると、塀を乗り越えて練習するよりしょうがない。行くところがないですから。そうしたら、ぼくは400メートルで優勝してしまいました。

第1回国体は、国民体育大会兼日本選手権でした。日本選手権ですから日本で速いやつが出てきてやる。戦争から帰ってきた人とかいろいろな人が出て、そこで優勝したので「お前、速いじゃないか」ということになりました。日本で一番ですから速いでしょう。「あんた、いつ頃からどんな練習をしていたのだ」とみんなから質問もされ、じっとしていると、「さっきから見ているけれども、口の中に何も入れていないようだ。飯盒についているお米がお湯を入れるとまだ食べられますから、いかがですか」と、わざわざくれる人もいました。ぼくらはごちそうになりました。

試合の最後までいたら、昔、オリンピックに出た葉室鉄夫さんが毎日新聞の大阪に勤めていて、彼が来ていて「毎日新聞主催で琵琶湖横断というのをやるから、出てくれ」というのです。どういうふうに横断するのかというと、堅田の浮き御堂から大津まで泳ぐ。どのくらいあるかといったら、1万何千メートルあるという。「そんなの、腹が減ってとても

泳げませんよ。勘弁して下さい」と言ったら、「いや、いっぱい食べさせる。社のほうで都合をつけて飯を食わせますから出てくれ」と言うので、とうとう引っ張られて堅田まで行きました。確かに、白米のご飯が食べ放題、おかずは琵琶湖で取れた魚の水炊きみたいなもの。それで浮き御堂から百何人が泳ぎました。

ゴーグルなどはありません。ふんどしをはめて、グリースを塗るなどということはないから、日に焼けてどうしようもない。目は金目鯛のように腫れてしまい、ゴールがどこにあるのかよくわからない。そのうちに付いていた船もどこかへ行ってしまい、いない。おかしいな、どうしたのだろうと思いながら、水のあるところを泳いでいけば間違いないだろうと泳いでいたら、どこからか船が現れて「そっちじゃない、こっちだ。反対のほうに行っているよ」と注意され、方向転換しました。ずいぶん余分に泳いだのですが、3時間14分16秒で優勝してしまい、これまた話題になりました。「お前、大したものだな。この食糧難の時に3時間何分も泳いで、それほどへばってもいないし、大したものだ」と。

今度、「お前、まだ時間があるか」と聞かれました。「夏休みのことだからあります」「水泳教室を毎日新聞主催でやりたい。和歌山県のほうでいくつか設定しているから、手伝ってくれ。帰りの汽車の切符も買ってやる。その間の食べ物は保証する。アマチュア違反にならない程度で、多少の小遣い程度なら社のほうで出す」。えらく条件がいいから行くことにしました。

和歌山の九度山中学校に行ったら、プールには田んぼの水が引いてあり、下には田んぼの泥が入っており、ヒルが泳いでいる。そこでやったのですが、背が高く、スマートで速いのがいる。何という名前だと聞いたら、橋爪四郎だという。「お前、昔、やっていたのか」というと、「戦前、やっていました。勤労働員に行って、それでやめました。今は靴下工場に勤めています。私の出身中学は海草中学です」「いい泳ぎをしているから、大学に行って勉強しながら泳がないか」といったら、「願ってもないことです」。

当時、9月入学というのがありました。戦争から帰ってきた連中が入れるように、4月だけではなく9月入学というのもあり、彼は昭和21年9月に入ってきました。彼とぼくとはライバルです。そこで一生懸命に練習してやっていました。彼はまた器用だし、いい泳ぎをしているんです。結構速いんです。ただ、スプリントではないんです。スピードはあまりありません。しかし、やせている割に持久力はうんとあり、ぼくとライバルだといってやっていました。

それで、記録もだんだん伸びてくる。練習の時は、ぼくより橋爪の方が速い。ところが、

試合になるとぼくの方が速い。練習で一生懸命泳いでいてもなかなか彼に勝てないのですが、試合になると、ぼくの方が速い。だから、仮に練習で勝てなくても、それほど心配しないでやっていました。

ぼくらは神宮プールで泳ぎたくてしょうがないんです。だから、連合軍に頼みに行きました。当時、神宮プールは水泳のメッカでしたが、連合軍が接收して家族のレクリエーション、また、兵隊のレクリエーション設備として使っており、「お前たちは変なものを巻いて泳いでいるから貸せない」と言われました。ふんどしを見て、あんな野蛮な格好をして泳がれたのでは困る。家族も泳ぎに来ているし、子供も来ているから、そんなもの、見せられない。だから貸さないと言うのです。「じゃあ、海水パンツをはいて泳いだらいいか」と言うと、いいと言う。

22年7月末、人造絹糸というスフのパンツが配給になったので、それを持ってホイットニーという総司令部民生局長のところに行き、「これを履くからいいか」と言ったら、いいと言うので、ぼくらはふんどしの上にそれを履いて試合に出ることにしました。神宮プールが日本選手に試合の時だけ開放されたのが22年8月です。そこでぼくはいきなり世界記録を出しました。400メートルで4分38秒40。アメリカのビル・スミスという選手が持っていた記録を破って、これが世界記録でした。

しかし当時、日本は国際連盟から除名されています。除名されていると、記録は公認されない。外国人と泳いではいけない。外国に遠征してはいけない。いろいろな制約があります。記録が出ても、世界記録にはなりません。参考記録です。しょうがないなと思っていました。

23年になると、ロンドン・オリンピックです。ウェンブレーで開催されたのですが、日本とドイツは参加させないというのです。日本の場合、米軍をはじめ、なんとか行かせようとやってくれたのですが、最後にロンドンから来た電報には、「私たちはいまだにプリンス・オブ・ウェールズのことを忘れていない」とありました。ご存じだと思いますが、英国が世界に誇った戦艦がマラッカ海峡かどこかで日本軍に沈められたのです。そのために日本に対する敵愾心が旺盛で、そのことはいまだに忘れていないという電報が来たのですから、とても出られない。あきらめざるを得ませんでした。ドイツも戦争責任を問われて、結局、招待状が来ませんでした。

日本では、それなら、同じ日に同じ種目の競技をやるのではないかと、ロンドン・オリンピックに合わせて日本選手権をやりました。そうしたら問題にならないのです。1500

メートルでジミー・マックレーンというエール大学の学生が19分18秒5で優勝したのですが、18分37秒でぼくが優勝し、橋爪が18分37秒8でした。オリンピックで優勝した人の記録がぼくらよりも40~50秒遅いのです。日本の記録がロイターで向こうに行くと、「こんなに速く泳げるわけじゃないか。サツマイモを食べて泳いでいるようだが、そんなもの、泳げるわけがない」。冗談ではない、こちらからしたら、「こんな遅い記録でオリンピックは優勝できるのか」。お互いに合わないのです。その年は記録の比較だけで終わりました。いずれにしても問題になりませんでした。

当時の新聞は1枚しかなく、表面と裏面で終わりでした。ですからスポーツニュースなど載っていない。放送はNHKの第1放送だけで、テレビもなければ民間放送も第2放送もない。だから、ぼくらはつんぼ状態、どこで何があるのか全然わからない。ルールもわからない。そんなところでやっていた昭和24年6月15日、日本は非常に頑張っているからと国際連盟への復帰が認められました。日本のスポーツ界では水泳連盟が最初に国際連盟復帰が認められました。

国際連盟に復帰すると、今度は出した記録が世界記録になる。外国へも遠征ができる。外国の選手も呼べる。一緒に泳いでも構わない。それで喜んでいたら、すぐにハワイから招待状が来ました。「戦前は日本とハワイは切磋琢磨して水泳のレベル向上に励んだ。いよいよ6月15日付で国際連盟復帰が認められておめでとうございます。是非とも我々は招待したい」と、ハワイの在留邦人から電報が入りました。

ハワイに行くのなら、全米選手権に出られないだろうか、と、だんだん欲が出てきた。ところが、ビザが取れないのです。外務省に行って相談したら、「講和条約の前で、とんでもない。行けるわけじゃないか。今頃行ったら殺されてしまいますよ」。どうして殺されるのかと言うと、「まだ講和条約を結んでいないから、まだ敵と敵なのだ。こんな時に行かれても困る」と、外務省が全然相手にしてくれない。どうしたらいいのか。「総司令官のマッカーサーが許可しない限り、外国には行けませんよ。とくにアメリカには行けません」。

しょうがない、なんとかマッカーサー元帥に会いたい。当時、キャビー原田というマーカット少将の副官がいました。もう一人、民生局長の副官をやっていたタガミ中尉。その2人が二世として進駐しているなかで一番偉いというか人望があるので、これに連絡を取ってなんとかマッカーサーに会えないかと頼んだらよろしいということになり、渡航間近だったのですが、ぼくら、マッカーサー元帥に会いに行きました。

マッカーサー元帥は、例の日比谷の第一生命ビルの6階にいました。その部屋まで案内

されて行ったのですが、緊張して震えてしまいました。マッカーサーは、「これに私がサインすると出られるから、行ってこい。その代わり、負けたらだめだ。負けても卑屈になってはいけない。勝ったからといっておごってはだめだ。行く以上は頑張り。負けたら、ひょっとして帰りのビザは取り消しになるかもわからない。」(笑)こっちは本気にして、「閣下、お願いします」と最敬礼してサインしてもらいました。今のパスポートとは全然違います。連合軍司令官とか何か書いてあるんです。

ぼくらは、隠していた闇物資を神田の間屋で見つけてブレザーコートを作りました。軍隊払い下げの洋服など着ていったらやられてしまうからだめだというのです。靴も、ぼくは軍隊払い下げの靴を履いていたら、これでは戦争のことを思い出してやられてしまうからだめだ。短靴を履いていけと言う。短靴を探して上野や浅草に行ってやっと見つけた。日の丸はつけてはいけないと言うので水泳連盟のマークをつけ、いよいよ羽田から出発しました。パンアメリカンの37人乗りの飛行機に乗り、最初に大鳥島に下り、そこで給油をし、休息もして、今度はミッドウェーで同じく給油と休息、それからホノルルに寄りました。

台風のシーズンでもあり、飛行機が揺れました。落ちるのではないかと思って、そちらの心配が大変でした。日本の選手が飛行機で外国遠征をしたのは水泳が初めてです。それまでは船で行っていました。ぼくらが初めて飛行機に乗ったわけで、全然知識がないから、体操をやらないと体がなまってしまうと飛行機の中で体操をさせられ、ふらふらになってしまった。機長に聞きに行くと、「空気が薄いからこんなところでやったらひっくり返ってしまうよ。」(笑)冗談ではない、逆効果だったわけです。即座にやめて、到着するまでじっと待ちました。

確か4日かかりでロサンゼルスに行きました。途中、ハワイでも歓迎されましたが、当時、AAUというアメリカ体育協会の中に水泳の連盟があり、そのフェリスという理事に事前に、全米選手権に出してくれと電話をしておきました。「結構です」「ただ、標準記録はあるが、日本の選手は速いから」「そんなことは関係ない。結構です」。それで行ったのですが、日本の新聞には大歓迎などと書いてあるから行ったら大変なものだろうと思っていたら、連絡がうまくついていなかったこともあるのでしょう、とんでもない、寂しい到着でした。話がずいぶん違うなと思っていました。

宿舎は、ホテルに泊まったらいつ襲撃されるかわからないから、ホテルはやめました。和田勇という人が、白人社会の中に居を構えて住んでいる。ここなら安全だ。周りは全部

機動隊で固めるから心配いらない。そこに泊めてもらうことにして、それからはこちらでづくめです。当時、日本から行く人は全然いませんから。ビフテキなど、皿に山積みして持ってくるわけです。日本では食べたことがないから、食べたらうまい。たいへんうまい。がつがつ食べて、下痢の連続です。果物はどっさり出てくる、ミルクは大きなピッチャーに入っていてガーッと飲んでしまう。とにかくきりなく食べて、三つトイレがありました。どこをたたいても誰か入っているんです。ぼくだけではなく、ほかの連中も全部下痢していました。ところが、下痢しているわりには体調は悪くない。これなら大丈夫だと、行って練習をやっていました。

初めは新聞がジャップと言って、日本人のことをジャパニーズと言わないのです。ジャップがどうだこうだ書いてある。日本人の選手がよい記録を出したということで、プールがどうも短いのではないかと書いている。(笑)戦争で傷んで修理したために短くなったから、よい記録がでるのだ。また、日本の時計は回るのが遅いのではないか。だから、世界記録が出るのだ。冗談じゃないよと、ぼくらはカッカカッカしていました。

練習の時に村上というトレーナーがついていたのですが、「みんな集まれ」というので集まったら、練習はあんまりむきになってやるなというのです。みんなが見に来ているから、みんなが帰ってから本格的な練習をやるので、その間はフォームが崩れない程度にゆっくり泳げというのです。それでゆっくり泳いでいたら、愛想をつかして「こんなのではとても勝負にならない」と言ってみんな帰ってしまう。そうしたらまた集まる。「これから本格的にやるぞ」。夜中まで凄いい訓練をやりました。あくる日になると、それでもあきらめきれなくて見に来ているやつがいる。それも同じパターンで、帰ったらまた猛練習。どんどん記録が出てくるようになりました。空は明るいし、気分は高揚するし、どんどん泳ぐ気持ちになり、それでいよいよ本番になりました。

1500メートルの最初のレースは橋爪が出て、橋爪がトップでした。向こうの連中も興奮し、日本では1400メートルのところでもう終わりだというので鐘を振るのですが、向こうはピストルを撃つんです。それを1200メートルのところまでピストルを撃ってしまう。橋爪はもうラストだと思ってスパートするのですが、ラストではありません。首をかき上げながらまた泳ぐ。結局、1500メートル泳いでトップでした。

ぼくの時、たしかジョンソンというのが2番でしたが、それを180メートル離して1着。初めは物凄く速いのですが、そのうちにどこかへ行ってしまふのです。おかしいなと思ったら180メートル差がついていました。ぼくが着いてしばらくすると、何か雰囲気

おかしいのです。本当に 1500 メートル泳いだかどうかと掲示員は首を傾げていて、報告に行かないのです。審判も、これだけ差があるのだから、確かに速いのだろうくらいにしか思っていない。結局、1 コースに 3 人ずつ掲示員がいるのですが、しばらく時間が経ってから報告に行き、これは大変な記録だということで大歓声が来ました。それから大騒ぎになって、あくる日から新聞は “ The flying fish of fujiyama ” というタイトルでバンバン記事を書き始めました。それまでは虫眼鏡で見なければわからないくらいの記事で、悪口だけは大きく書いてあったのですが、ジャップはジャパニーズに変わり、いろいろなことが一夜にして変わってしまいました。

「フジヤマの飛び魚」とはいい名前をつけたものです。それも英字新聞が書いたものです。ぼくは 4 種目に出たのですが、4 種目、予選・決勝とも世界記録で、問題にならない。みんなびっくりして、これは大変なことだということで大騒ぎになってしまった。最後の日にはとうとうロサンゼルス市長が来て、「市民がみんな見たいと思いが切符が買えなかった。なんとか顔だけでも見たいといっている。ロサンゼルスの大通りを交通止めするから歩いてくれ」というのです。それだけではなく、二世もたくさんいてどれが選手かわからないから日の丸をつけるという。「うちのほうでもう準備してあるから、それをつけて歩いてくれ」。話はずいぶん変わってしまいました。

ぼくらはロサンゼルスの大通りを歩いたのですが、その前、試合が終わった時に、ある紳士がぼくのところに来ました。「君、古橋か」「そうだ」と言ったら、「私はヘルメス・スポーツ財団の理事長だ」と言うのですが、当時は英語もそんなにうまくないので通訳を呼びました。このおじさんがさっきからぼくのパンツを引っ張っているのだが、スフのパンツだからこれがいやなのか、中にふんどしを履いているから、それが何か問題なのかかわからない。聞いてもらったら、履いているパンツをくれというのです。それならと言って脱いで渡したら、下に履いているサポーターのようなものは何だという。これはふんどしだと言うと、それもくれという。(笑) どうするのかといたら、ヘルメス・スポーツ記念館というたいへん立派な記念館がロサンゼルスにあり、そこに飾りたいというのです。

あくる年、南米に行く時に、タラップの下にその紳士がいるんです。あのふんどしのおじさんです。(笑) 昼飯をごちそうするから、一緒に見に来てくれというので行ったら、「fundoshi」と書いてふんどしが展示してあって、恥ずかしいやら、うれしいやら。また、安物のスフのパンツが額にはめておいてあるんです。

試合が終わってからのロサンゼルス大通りの行進も凄かったです。軍楽隊に続いて、日

の丸の旗とともに行進したのですが、歩調を取らなければいけないような歩きになりました。それが最後の日で、帰ってきましたが、もう大騒ぎです。ジャップどころの騒ぎではない、ジャパニーズに全部戻り、新聞は1面から三十何面まで我々のことばかり。「やつら、大したものだ」などと書いてあるのです。スポーツには国境がないとかどうか、昔からいろいろな話があります。我々も、自分で言うのもおかしいのですが、大したものだとその時に思いました。

その時、ロサンゼルスに日本の選手が来るから見に行こうと、南米の在留邦人が来ていました。何人か水泳好きな連中、あるいは幹部の連中が来ていたのですが、それを見てみんな感激してしまいました。是非とも南米に呼ぼうということになり、ブラジル、ウルグアイ、アルゼンチン、チリ、ペルー、全部向こうが用意して、遠征に来てくれということで昭和25年(1950年)南米に行きました。

飛行機は4日間かけて、ニューヨーク、マイアミ、リオデジャネイロを經由してサンパウロに着きました。サンパウロの飛行場は在留邦人6万人が集まって、滑走路が人の波でした。みんな大歓迎でした。ところが、当時、日の丸を振ってはいけないからそんなものは揚げていないのですが、クビ実験です。本当に日本から来たかどうか確認に来ているのです。切手をぱっと見せて「これはどこの切手かわかるか」「これは日本の何銭の切手だ」、お金を用意して「これは日本のお金でいくらか」、新聞の切り抜きを見せて「これは誰だ」。答えると、「おかしいな」。アメリカの回し者だと思っているのです。

ぼくら、片言でも英語が出るものだから、英語が出てくる日本人などいないと言う。どうもおかしいと言う。特に当時は、勝ち組、負け組で、日本人同士の殺し合いがあり、大変でした。「日本は勝ったのだ」「いや、負けたのだ」と、毎日1人か2人殺されていました。そういう場にぼくらは行ったわけで、どうも信用されない。これはアメリカの回し者だと、負け組、勝ち組、両方がお互いに探りあいをしていました。

試合になったら、「大日本帝国水泳選手団歓迎」となっており、「戦傷将兵に黙祷」「宮城遙拝」とやるわけです。サンパウロのパカエンブーというサッカー場の隣にある大きなプールで試合をやったのですが、アデマールというサンパウロ州知事、当時は州統領と言っていましたけれども、その州統領が日の丸を揚げてよろしいと初めて許可しました。日の丸を揚げると、それを見たくて大勢の日系人がサンパウロに集まってきました。当時、奥地も含めて四十何万人いたのですが、彼らがトラックに乗ってどんどんサンパウロに集まってきました。水泳場が大騒ぎになる。記録はぞくぞく出る。泳ぎはブラジル人など問題

にならない。みんな勝ってしまう。そんなことで大変なことになりました。

歓迎も、今日は勝ち組のパーティだ。あくる日は負け組のパーティだ。そこで勝ったとか、負けたとか、何も言っではいけない。質問があっても返事をするな。すると、蹴飛ばされる、首を絞められる、つばをひっかけられる、もう大変なものでした。しかし、こちらでも我慢してやっていました。

ぼくはたまたま最後にリオデジャネイロで水を飲んだのです。当時はガラナを飲んでいたので、飲んだ後がどうもすっきりしないのです。そこで、やっぱり水がいいと思い、リオデジャネイロのホテルに瓶に入っている水があったので、ボーイにこれは消毒したのかと聞いたら「消毒してあるから飲んでいい」というので飲んだのです。そうしたら、その晩からものすごくおなかが痛くなってしまった。アメーバ赤痢です。しかし、アメーバ赤痢だと言ったら隔離され、日本に帰れないというのです。どうなるのかわけがわかりません。まだ講和条約の前ですから。

とにかく我慢して、これも抗生物質がないからエメチンという注射をやらなければいけない。ブラジルからウルグアイに行く飛行機の中でも、トイレに座りっぱなし。ウルグアイに着いてもホテルで寝っぱなし。プールにも行かない。アルゼンチンでもだめ、チリに行ってもだめ、ペルーに行っても泳げない。4人で行ったのですが、ほかの3人が泳いでいました。ところがペルーでは、ムラマツさんという日系の会長がいて、その家で寝ていたのですが、当時の陸軍大將がペルーの水泳連盟の会長で、「君がフルハシか。観衆が騒いでどうにもならない。100メートルでいいからなんとか泳いでくれ」と言われました。「ぼくは練習も何もしていないから泳げない」「大変だろうと思うけれども、泳いでくれ」。とうとう連れて行かれ、100メートル泳ぎました。そうしたら、それまでは泳がないのなら切符代を返せとかなんとか、えらい騒ぎだったのがパッと収まり、また帰って寝ました。

帰りにアメリカのエール大学に寄ったら、ジョン・マーシャルにレースをやってくれと申し込まれました。ジョン・マーシャルはオーストラリア人で、400メートルの世界記録保持者です。エール大学に留学していて、そのキップスという監督は私が病気なのを知っていて気の毒がったのですが、とにかくマーシャルと泳いでくれというのです。練習していないからだめだと断ったのですが、とうとう泳ぐことになりました。エール大学の体育館の中に立派なプールがあり、そこで泳いだらタッチの差でぼくが勝ってしまいました。まさか勝つとは思わなかったから、大成功です。

南米遠征、いろいろ問題がありましたが、日本がどうなっているか、わけがわからない

からみんな物凄い喜び方でした。ぼくらはそういうことにいつでも遭遇し、戦後いろいろなことがありました。

昭和 26 年、ぼくは会社に入りましたが、27 年、戦後はじめてのヘルシンキ・オリンピックが行われました。それにどうしても出たほうがいいと言うのです。ただ、予選を通らなければ出られない。ぼくは予選で 3 番になりました。当時はエントリーが 1 種目 3 人ということで、たまたまエントリーの 3 人の中に入り、ヘルシンキまで行きました。

当時、飛行機はみんな南回りです。那覇から香港、香港からバンコクと、ずっと南周りです。1 週間かかってヨーロッパまで行き、ストックホルムで練習をやっていました。それで、本番のヘルシンキの大会に出たけれども、当時は練習をいくらやろうが疲れるばかりで、記録が全然出ないのです。ところが外国人は、フルハシは予選、準決勝はゆっくり泳いでも決勝で本気になって泳ぐのだろうとあって、みんな賭けをやっていて、こちらは、予選を通るか通らないかで一生懸命にやったけれども、どうにもならない。早稲田の田中君と一緒に 400 メートルに出たのですが、準決勝で彼は落ちてしまい、ぼくだけが決勝に残ってしまった。若手が全滅してしまったから、結局、最後まで泳がざるを得なくて泳いだのですが、どうも体が走らない。デッドエンドでフーフー言って終わり、日本に帰ってきました。

時間が来てしまいました。本当はもっといろいろな話をしたいのですが、話しているときりがありません。

そんなことで、ぼくは戦後、いろいろのところでいろいろなことにぶつかりました。オーストラリアでも街中で首を絞められたり、オーストラリア国内で水泳禁止を食らったりしました。泳いだら国外追放だということで泳げない。ビーチでも泳いではいけない。いろいろなことがあって、話し出すときりがない。いろいろなネタを背負い、昭和という時代にいろいろなことに遭遇しながら歩いてきました。

当時は、日本がこんなに立派な国になるとは思いもしませんでした。立派すぎて、このごろは墮落してしまっただめですね。今の選手を見ていても、こんなことで日本を背負って立てるのかと思うようなやつが選手でやっています。選手はまだスポーツをやっているからいい方で、一般のやつはいやになるほどだらしがない。ある程度締めてかからないと、とんでもない国になってしまうのではないかという危惧の念を持っています。

従って、そういうことにお役に立つようにいろいろなところでやっているのですが、1 人や 2 人の力ではどうにもなりません。やはり皆さんがそのつもりでやっていかないと、

日本はどんどん下がってしまい、今度は上る機会がなくなってしまうのではないかという気がちょっとします。そんなことで、ぼくらは非常に心配しています。

ぼくはいろいろなことに直面し、いろいろな経験を積んで、自分自身も非常によかったし、日本のために少しでもお役に立てたらということでやってきましたが、いい時が過ぎたらだんだん下がってしまいました。今は国民自体がだらしくなっています。さっきから何回も言うように、この辺でふんどしを締めなおしてやらないと、大変なことになるのではないかと思います。時期がもう遅すぎるのではないと思うぐらい時間が経過しているのですが、そんな気持ちでいます。まだしばらくは生きられると思うので、機会があれば、そういうことで貢献していきたいと思っています。

実は私、背骨のところをおって2年ちょっとになります。普通なら立ってガンガンやるのですが、痛いものですからこのところ昔ほど精彩がありません。まあ、しっかり頑張っ
て生きようということです。

ご清聴いただき、たいへんありがとうございました。日建設計さんにもこのような機会を与えていただいたことに感謝するとともに、お集まりいただいた皆さんにも、私のつまらない話を聞いていただいて感謝の念でいっぱいです。これからもご健康に気をつけて頑張っていってほしいと思います。ありがとうございました。(拍手)